山梨県埋蔵文化財センター調査報告　第18集

韮崎市藤井町

駒井遺跡発掘調査報告書

1986. 3

山梨県教育委員会
山梨県土木部

序

駒井遺跡は、県道韮崎増富線が国道141号線から分岐し、約270ｍほど東に向った韮崎市藤井町駒井字砂宮神に位置しております。たまたま県土木部韮崎土木事務所が、当該個所の道路拡幅工事を実施することとなり、それに先だち当埋蔵文化財センターが発掘調査を担当いたしましたが、その成果をまとめたのが、本報告書であります。

本遺跡の位置する塩川右岸の沖積台地、いわゆる藤井平は、現在も穀倉地帯として知られていますが、付近には縄文時代から中世に至る遺跡が連綿として形成され、古くから人類の足跡の豊かな地域であります。例えば本遺跡の西、七里岩の南端近くには、故志村滝蔵氏が全生涯を捧げて発掘調査を続けたことで有名な坂井遺跡があり、一方、塩川の対岸茅ヶ岳の山麓には、平安時代、３御牧の１つ穂坂牧や、後院牧の小笠原牧などが置かれております。また北西には「葛井」の墨書銘のある土器が発見された中田小学校遺跡があります。

本遺跡は、対象の地域も狭く、調査の期間も１ヵ月に過ぎませんでしたが、奈良時代末期から平安時代初頭と考えられる住居址２軒と縄文時代から中世までの遺物多数が発見されました。量的には平安時代の中頃、10世紀代の遺物が圧倒的ですが、最も注目すべきは９世紀代のロクロ整形の甕の存在です。報告者はこの甕の生産について、須恵器生産集団の土師器生産への転換とこの地域への移住・定着が、公権力によって行われた結果であろうという推論を試みております。近時北巨摩地区における発掘調査の成果が相次いで報告され、考古学的な面からの地域の歴史、とくに平安時代の歴史の解明が著しく進展していますが、本書もそうした研究資料の１つとして、ご活用いただければ幸甚に存じます。

末筆ながら、種々ご協力を賜わった関係機関各位並びに直接調査に従事していただいた方々に厚く御礼申し上げます。

１９８６年３月

山梨県埋蔵文化財センター

所長　磯　貝　正　義

例　　言

1．本書は、韮崎市藤井町駒井字砂宮神に所在する駒井遺跡の発掘調査報告書である。

2．本調査は、山梨県埋蔵文化財センターが実施した。担当者は、保坂康夫である。

3．本書は、保坂が執筆・編集した。遺物写真は、塚原明生(日本写真家協会会員)が担当した。

4．調査参加者は、下記のとおりである。（敬称略、順序不同）
深沢良勇、深沢勇人、加々美家平、宮川澄子、作地善重、上村水枝、小林松子、保坂実香子、新藤すみ江、清水夏子、河西学、高野俊彦

5．整理作業参加者は、下記のとおりである。（敬称略、順序不同）
岩瀬光男、深沢勇人、渡辺美和子、清水理恵、深味義博、名取洋子、弦間千鶴、若尾澄子、小笠原睦子、後藤良美

6．調査から報告書作成に至る過程で、次の方々から御協力、助言を賜った。厚く御礼申し上げる次第である。（敬称略、順序不同）
三井哲男、松村公雄（以上韮崎土木事務所）、末木健（文化課）、山下孝司（韮崎市教育委員会）、戸島正人（駒井区長）、守屋庄治

目　　次

Ⅰ　調査に至る経緯……1

Ⅱ　調査の方法と経過……1

Ⅲ　立地と環境……2

Ⅳ　層序……4

Ⅴ　遺構……4

Ⅵ　遺物……5

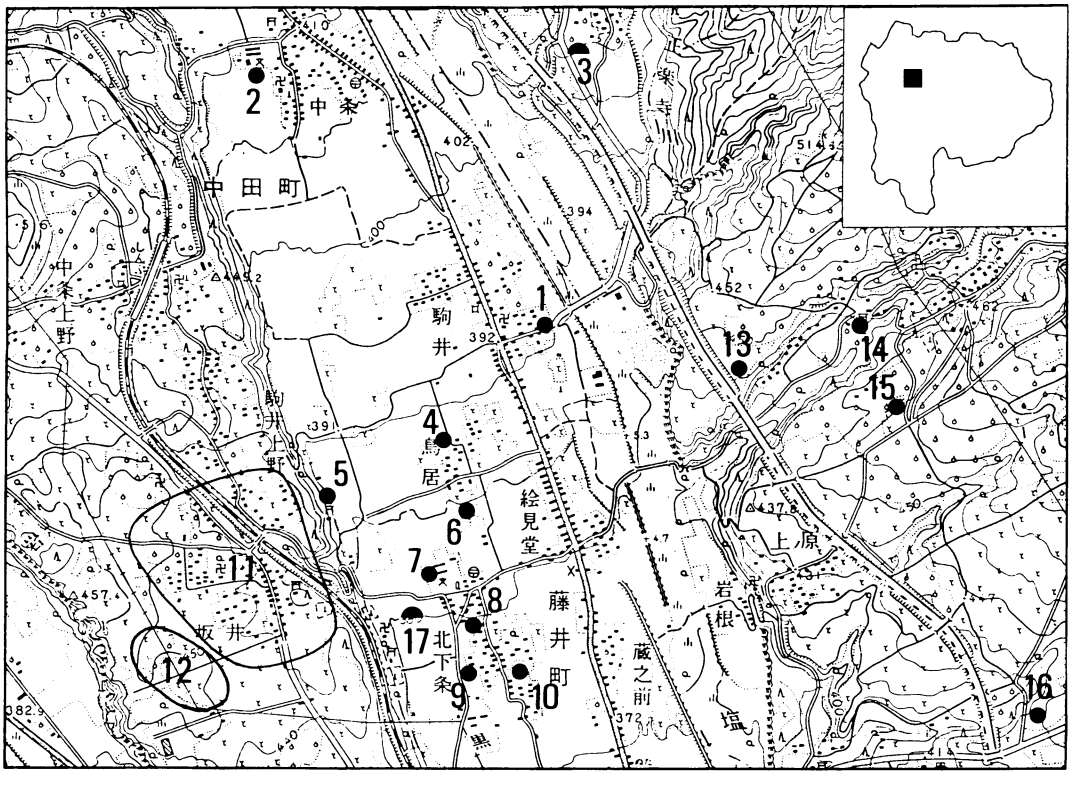
Ⅶ　まとめ……15

I　調査に至る経緯

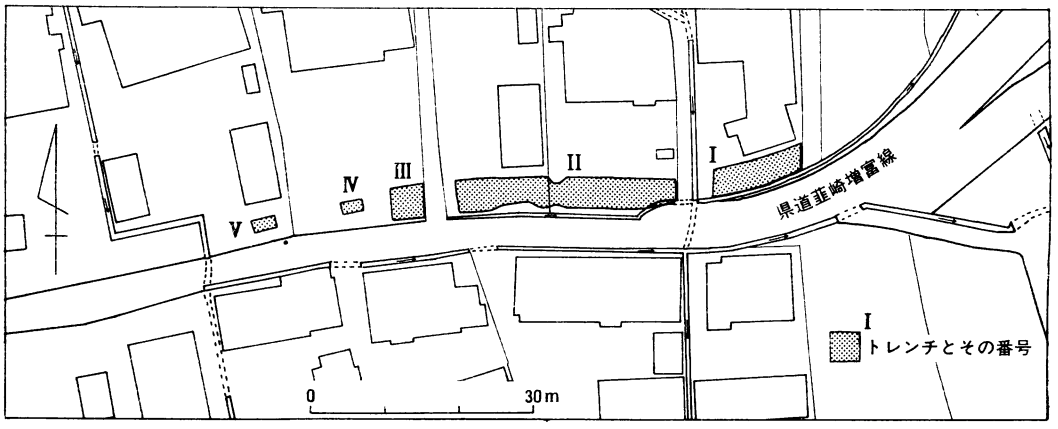
県道韮崎増富線は、韮崎市藤井町字駒井で国道141号線より分岐し、明野村をとおって須玉町江草へ通じ増富に至る幹線であり、特に明野村への重要な道路である。国道からの分岐点がある駒井は明野村の表玄関であり、交通量が非常に多いが、この付近の県道は一車線分の幅しかなく、車がすれ違うこともできない状況であった。県土木部韮崎土木事務所では、この部分の道路を拡幅し二車線にする工事を昭和60年度に行うこととなった。一方、その旨通知を得た県教育委員会文化課は、現地を踏査したところ土器の散布を確認したため、韮崎土木事務所と協議し、試掘調査を行い範囲を確定した後に発掘調査を行うこととなった。そこで、県埋蔵文化財センターは、昭和60年5月27日に試掘調査を行い、昭和60年7月22日から同年8月21日まで調査を行った。

II　調査の方法と経過

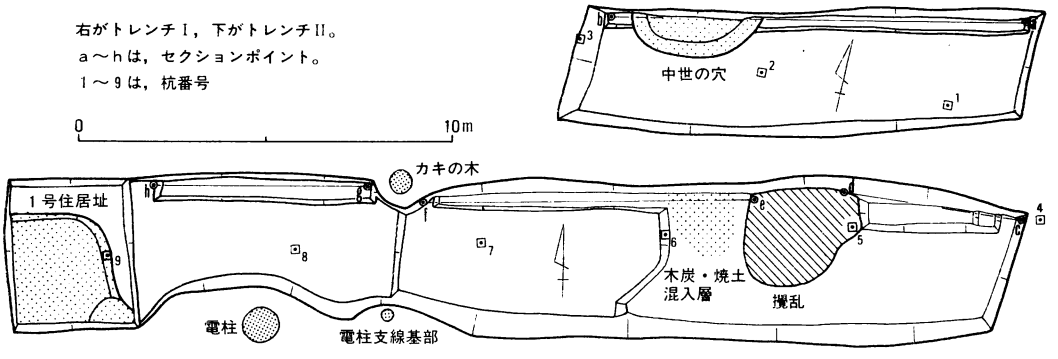
工事対象地域は、国道141号線からの分岐点の駒井交差点より東へ約270m、幅約5mである。試掘調査では、1.5m×1mの試掘坑を5ヵ所設定し、工事対象地域約2000m²のうちその東端部の約400m²に遺物含包層があることを推定した。第2図のトレンチⅣ・Ⅴは最も西に設定した試掘坑であるが、建物の攪乱が70～80cm、その下方には無遺物の砂層があった。さらにその西方では、遺物の散布がないこと、建物による攪乱が激しいこと、礫層が広く分布するらしいこ



第1図　遺跡位置図（25,000分の1）



第２図　トレンチ配置図（1,000分の１）



第３図　トレンチＩ・II完掘状況図（200分の１）

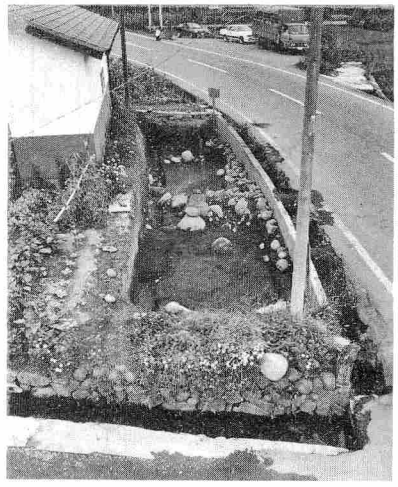
となど考え合わせ、発掘範囲を東部のみに限定した。発掘調査では、道や側溝、水道管等迂回や撤去不可能なもの以外の部分にトレンチを設定した（第２図）。調査杭を５ｍ間隔で一直線に設定し、遺構や遺物の実測の基準点とした（第３図）。出土遺物の出土地点を可能な限り実測しながら掘り進んだ。トレンチIIIでは、遺構や遺物がまったく出土せず、一部が攪乱を受けており、それ以西の発掘を断念した。トレンチＩ・IIでは遺物包含層がよく残存し、遺構もあった。

III　立地と環境

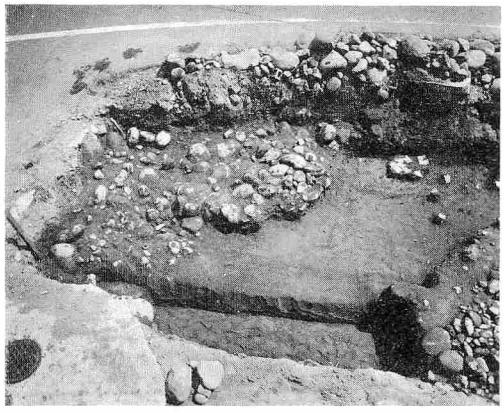
本遺跡は、塩川右岸の沖積平地、いわゆる藤井平にある。塩川は、八ヶ岳南東麓、奥秩父山地西部、茅ヶ岳山麓の水を集め、藤井平を出て釜無川に合流する。こうした地理的条件から土地は非常に肥沃で、古くから穀倉地帯として知られる。しかし、土壌は砂質で透水性が大であり、過旱に注意を要する。藤井平は一様に平坦ではなく、塩川に沿って小起伏がある。また、比高２～３ｍほどの崖線もあり、塩川から陸化した非常に新しい段丘面で、小起伏は段丘形成以前の河道および自然堤防や中洲であろう。藤井平には黒沢川と藤井堰が流下するが、乾燥した台地上を好む縄文中期の遺跡が多いことを考え合わせると、意図的に作られたり維持された

流路であるとも思える。ともあれ、この流路により、土壌の欠点は克服され穀倉地帯が成立したと言える。

藤井平には、縄文時代から中世に至る遺跡が連綿と形成された。中田小学校（縄文・弥生・奈良～中世、第1図中2）、坂井1（縄文～古墳，4）、大原臼窪（縄文，5）、宮前（弥生，6）、後田（縄文，7）、北下条1（縄文～平安，8）、殿田（弥生，9）、北下条2（弥生，10）の各遺跡が知られる。また、後期古墳（第1図17）もある。藤井平の西方には韮崎岩屑流を基盤とする韮崎台地が、東方には黒富士の噴出物を基盤とする穂坂丘陵がある。前者では、坂井2（縄文・弥生，11）、坂井南（縄文～平安，12）の各遺跡が知られている。後者では、砦（13）、宮之下（14）、汁森（15）、女夫石（16）が知られているがいずれも縄文の遺跡である。また、後期古墳の穴塚（3）がある。藤井平には上述の洪積台地同様、縄文の遺跡も多く、中田小学校、坂井1、後田、北下条1の各遺跡では縄文中期の土器が確認されており、古くから居住に適した安定した土地であったろう。古墳前期の集落が韮崎台地上（坂井南）や竜岡台地（久保屋敷）で発掘されているが、藤井平では、ただ北下条1遺跡で若干の遺物を見るのみである。一方弥生の遺構の発掘例はあり、藤井平での弥生から古墳への連続性という点で問題がある。古墳後期の遺物は北下条1と本遺跡で確認されており、古墳もあることから、本地域の水田開発は、この時期にかなりの水準にあったと思われる。佐久往還や穂坂路に臨むように立地する古墳の存在は、藤井平や、穂坂丘陵に覇権を唱える有力家族の存在を示すものであろう。これ以後、連綿と遺跡は形成され、また、「条」の付く地名や方形土地割もみられ、古代以後安定した食料生産地となっただろう。九世紀後半に出現し計画村落の論議もある八ヶ岳南麓の平安時代遺跡群や北巨摩郡下に比定される三御牧の成立、牧監の庁所の位置を考える場合、当地を無視することはできないであろう。

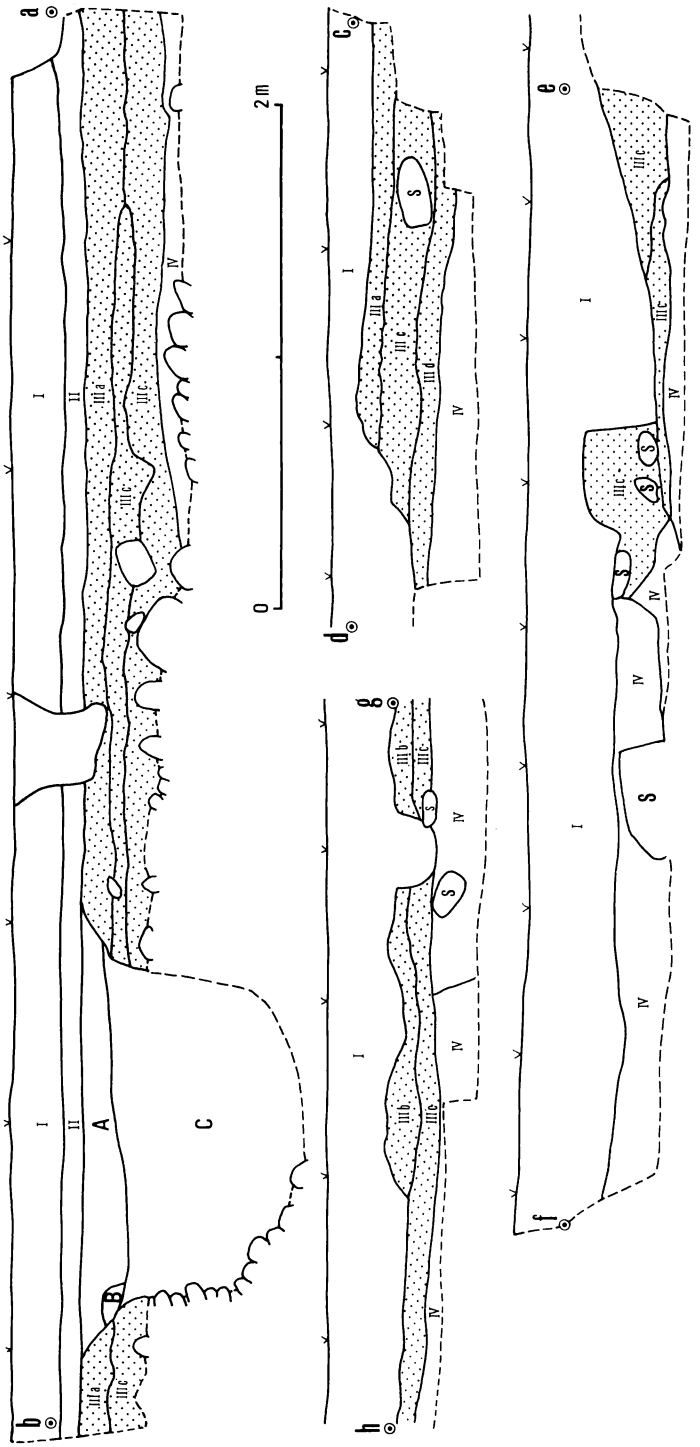


第4図　トレンチⅠ完掘状況（西から）



第5図　トレンチⅡ東部（北から）

第6図　トレンチⅡ西部（東から）



左がトレンチⅠ北壁、中上がトレンチⅡ東部北壁、中下がトレンチⅡ西部北壁、右がトレンチⅡ中央部北壁、a～hはセクションポイント。水系レベルは標高 390ｍ。

第7図　トレンチⅠ・Ⅱ土層断面図

また、郷名の比定もこれまでなされていなかったが、速見郷とする見解が示された。

Ⅳ　層　序

基本的には、第Ⅰ層表土層、第Ⅱ層鉄分沈着層、第Ⅲ層砂質土層（遺物包含層）、第Ⅳ層砂・礫層に分けられる。第Ⅰ層は、田畑の耕作土や建物等の攪乱層を含む。第Ⅱ層はトレンチⅠのみにみられるが、トレンチⅡ西部Ⅲｂ層もこれに準ずるものかもしれない。若干の遺物を含む。第Ⅲ層はａ～ｄに分けられる。Ⅲａ層は暗灰色を呈す。Ⅲｂ層は赤黄色、Ⅲｃ・Ⅲｄ層は黒色を呈す。Ⅲｃ層のうちトレンチⅡ東部では礫を多く含む。トレンチⅡ中央部では、Ⅲｃ層下底部に木炭片や焼土を含む層がみられる。Ⅲｄ層は弥生土器のみを含み砂層に近い。第Ⅳ層は無遺物の砂・礫層である。トレンチⅡ中央部では上層から順に礫層、暗灰色砂層、赤褐色砂層と変化する。同西部でも下から明褐色砂層、礫層と変化する。この礫層は砂層の上に乗り、旧河川の自然堤防かもしれない。この礫層上部にも遺物が混入する。

Ⅴ　遺　構

1号住居址　トレンチⅢで

包含層が存在しなかったため、その西限を確定するためのトレンチを調査中に確認した。南側を県道で、また西側を攪乱、水道管、道で切られており、住居址の北東コーナーのおおむね4分の1にあたる部分を検出した。上下2層になっており、上部の住居址は東壁が 2.8m、北壁が 2.6m、下部は東壁 2.5m、北壁 2.6mである。平安時代のカマドが東壁中央かやや南よりになることからすれば、一辺5m以内の住居址であったと思われる。上部の床面には灰白色の粘土（第9図中セクション図の縦ジマ）が貼られていた。砂地のため壁はかなり崩れていた。覆土は、A攪乱層。B黒赤色、C暗赤灰色、D黒灰色、E明赤灰色、F黒色の砂質土で、Dは木炭片や焼土を多く含み、Fは粘性が強く、Eは砂層に近い。下部では貼り床はなかったが、床面がかなり堅い。覆土（第9図中セクション図の網点）は、G黒灰色、H黒色、I暗灰色、J暗赤灰色の砂質土で、Hは粘性が強く、Iは砂層に近い。Kは地山の明褐色砂層である。柱穴はない。遺物は覆土中に多量にあるが、大型の甕破片が床面近くのカマド付近に多く出土した（第9図)。カマドは東壁にある。そでの石等はみられず、貼土のみで構成されていた可能性がある。住居上部のカマド土層は、bが黒灰色粘土、dが焼土、a黒灰色、c暗赤灰色の砂質土で、aは粘土をcは焼土を多量に含む。下部では、e暗赤灰色砂質土、f木炭・焼土・灰を多量に含む黒灰色砂層、gやや木炭・焼土を含む暗灰色砂層である。下部のカマド底部は床面より5cmほど窪んでいる。窪みの西部に大型扁平石を置き、周辺に4個の石を配している。焚口の構造か崩れたカマド用材かは不明。カマドや床面、セクション等から判断して、住居の上下部は掘り込みよりも二つの住居址と考えたい。なお、住居址北方に直径70cmほどで、深さ50～60cmほどの穴があるが、性格は不明。

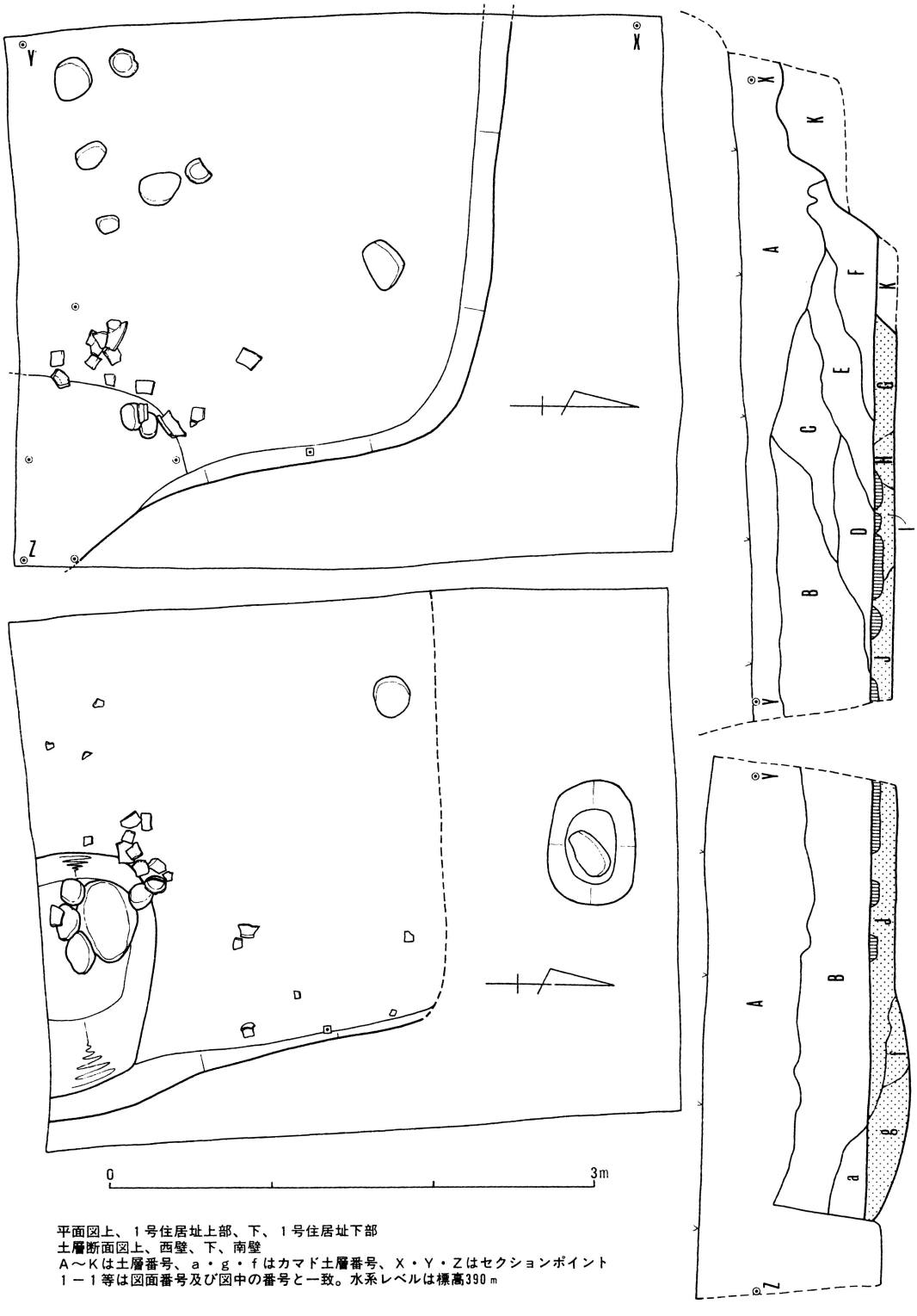
第8図　中世の穴

他の遺構としては中世の穴がある（第8図)。トレンチI北壁の断面（第7図）をみると、平安時代の遺物を中心とする包含層を掘り抜いており、中世と思われる土師質土器も出土している。覆土は、A暗灰色砂層、B灰・焼土混入層、C礫層である。礫層中には直径1m以上もある巨礫があった。また、拳大の鉄滓1点が含まれていた。開墾のために巨礫を取り除こうとしたものだろう。

Ⅵ 遺　　物

1号住居址　本住居址からは、土師器坏・甕と須恵器坏が出土した。特に床面近くに出土した大型破片を中心に記述する。

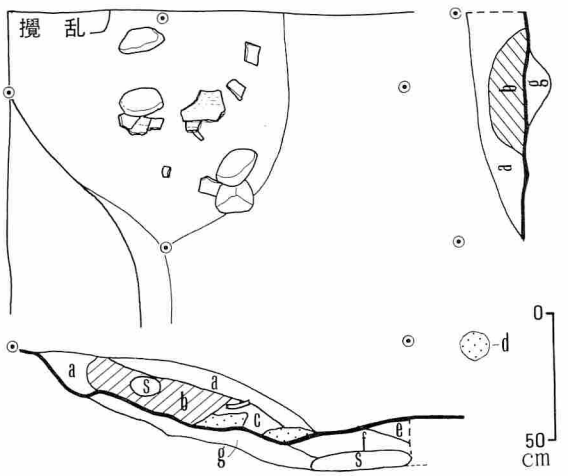
須恵器高台付坏(第13図1）　下部住居出土。底部は回転ヘラ削り。高台は貼付で、端部に深い溝が一条入る。他所はロクロ整形後は非調整。**須恵器坏**(同図2～4）　2は底部が回転糸切り、非調整。他所は非調整。内外面とも火だすきがみられる。4は底部は2と同様ながら、内



平面図上、１号住居址上部、下、１号住居址下部
土層断面図上、西壁、下、南壁
Ａ～Ｋは土層番号、ａ・ｇ・ｆはカマド土層番号、Ｘ・Ｙ・Ｚはセクションポイント
１－１等は図面番号及び図中の番号と一致。水系レベルは標高390ｍ

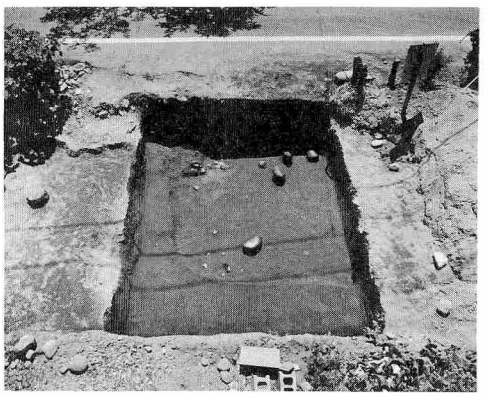
第９図　１号住居址平面図及び土層断面図（40分の１）

面はヘラによる回転調整がみられる。三者とも上部住居覆土中床面より20～30cm浮いて出土。**土師器坏**(同図５・６)　６は底部が静止糸切りの後、周辺ヘラ削り、さらに格子状暗文風ヘラ磨き。器体部外面底部側に薄くヘラ削りがあり、底部端に丸みが出ている。器体部外面に綾杉状暗文風ヘラ磨き。内面はロクロ整形後放射状暗文風ヘラ磨きがみられ、みこみ部も同様である。５は底部を欠損するが、外面底部側に横位ヘラ削り。内外面とも縦方向暗文風ヘラ磨き。内面の底部周縁に暗文風ヘラ磨きがめぐる。口縁端部に薄くヘラ磨きがめぐる。５・６ともに上部住居覆土中に20～30cm浮いて出土。

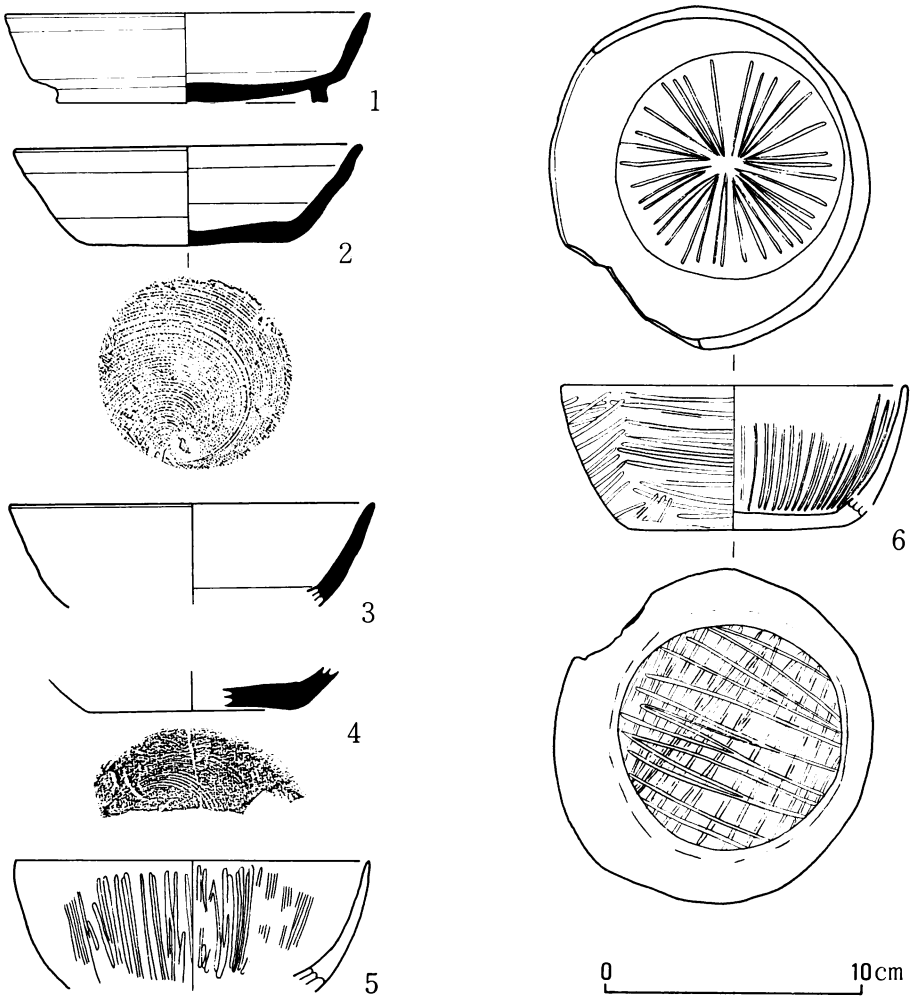


第10図　１号住居址カマド（30分の１）

甕（第14～16図）　ハケメ調整（第14図１～3）とロクロ整形とがあり、後者が圧倒的に多い。第14図１は接合しないが肩部以上、胴部、底部が残存する。内面横、外面縦方向のハケメ。口縁部は内外面ともハケメの後ナデ。胴部底側はその末端が横の後、縦方向ヘラ削り。後者はハケメの後。底部は木葉底、非調整。器壁は３～５㎜と均等に薄い。金雲母を若干含むも、黄褐色で、後の甲斐型甕とは異質な胎土。カマド内や北壁直下の床面上や覆土中出土。２・３は内外面とも縦方向ハケメ。器壁も５～７㎜と厚い。雲母をほとんど含まず、白褐色の胎土。これに類する破片は小量みられ、下部住居からも小破片が出土。２・３は上部住居カマドや覆土中出土。ロクロ整形は大型長胴と小型とがある。前者は口縁部が「く」の字に屈曲し、水平に近いものもある（第15図３）。端部は平坦かやや窪み、上方、下方あるいは両方につまみ出されて突出する場合が多く、つまみ出しにも強弱の差がある。口縁部は胴部が連続的にロクロ整形されている。胴部にはロクロ整形時の粒子の移動による無数のスジが入る。ロクロ整形以前の叩目らしきものがわずかに残るもの（第15図４・９)。縦方向のヘラ調整（同４）もみられるが、


第11図　１号住居址上部

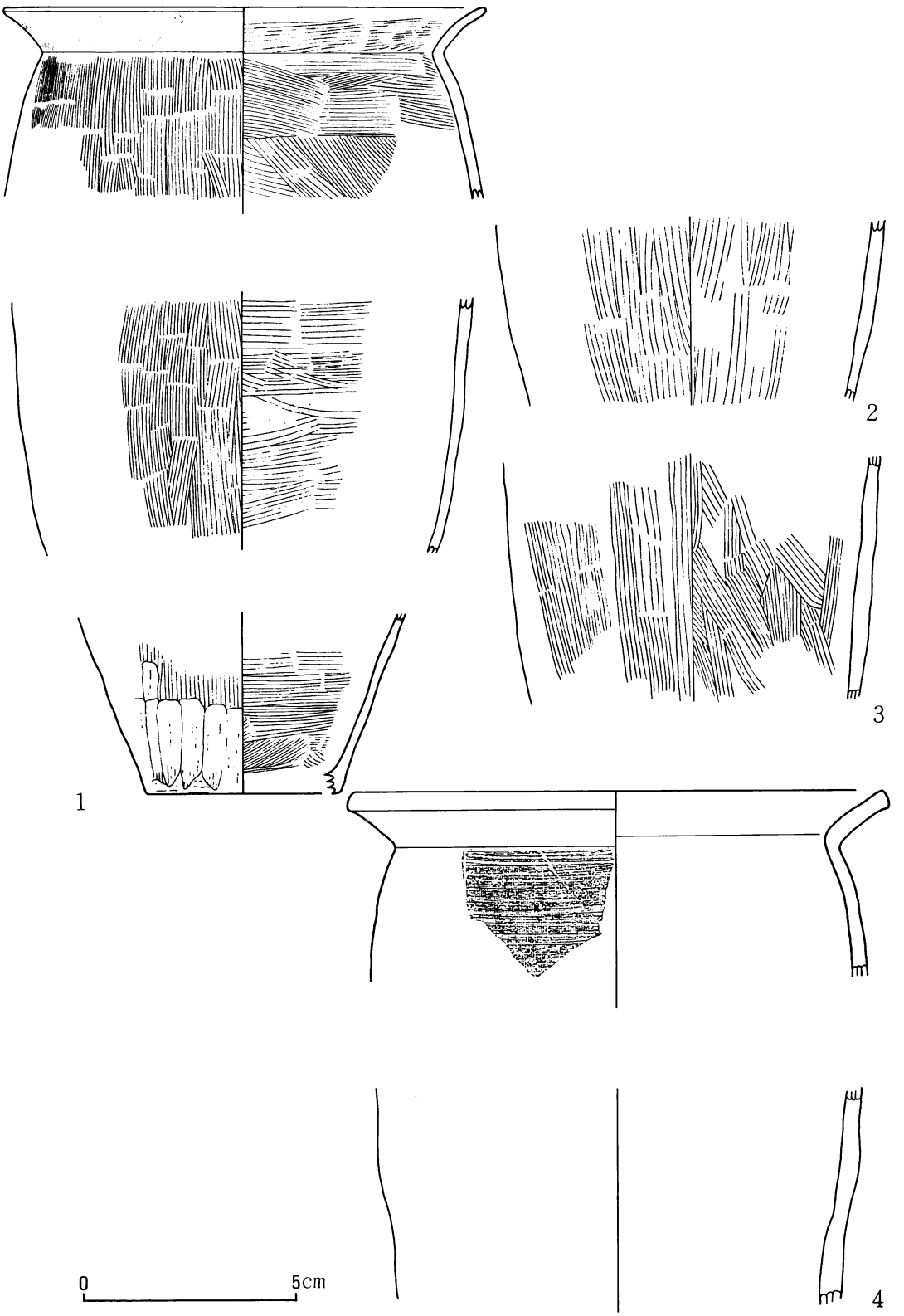
第12図　１号住居址下部



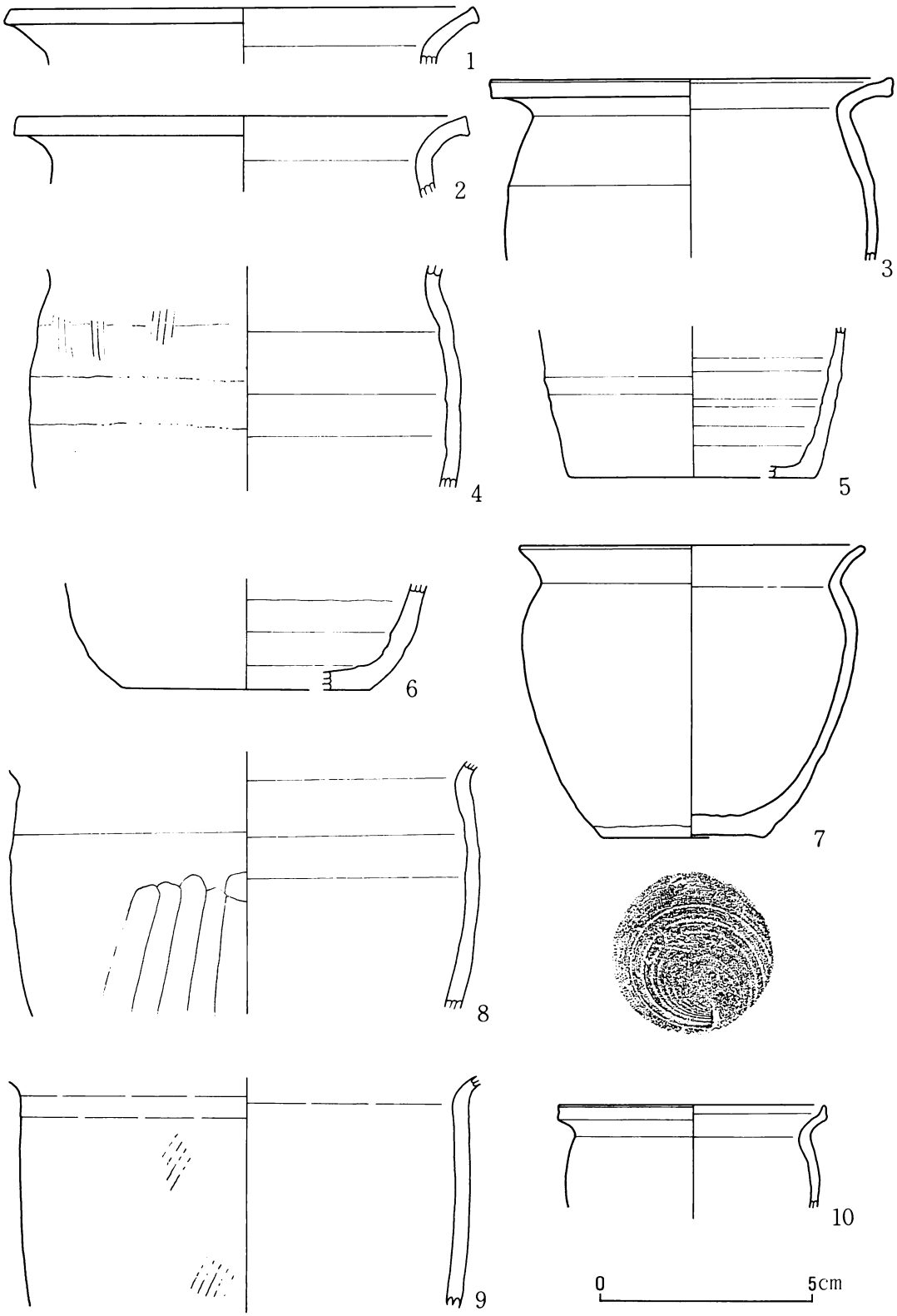
第13図　1号住居址出土土器(1)（3分の1）

図示したもののみである。底部破片は多くないが、胴部側に薄く横方向ヘラ削りのあるものが多く（第15図6，第16図2・3），1点だけだが縦方向ヘラ削りが厚くなされるものもある。底面はいずれも回転糸切りで、周辺をヘラ削りするもの（第16図1・2）もある。第15図5は底面全体が厚くヘラ削りされており、下部住居出土であることから技術的に先行するものと思われる。底部内面が「く」の字に屈曲し胴部器壁厚より底部が薄いものと、「ノ」の字で厚いものとがある。後者は小型甕の一般的な形態らしく、第16図2・3は小型甕の可能性もある。小型甕は口縁端がまるく底部端に薄く回転ヘラ削りされるもの（第15図7）と、口縁端を強く上方へつまみ出したもの（同図10）とがある。いずれも下部住居出土。

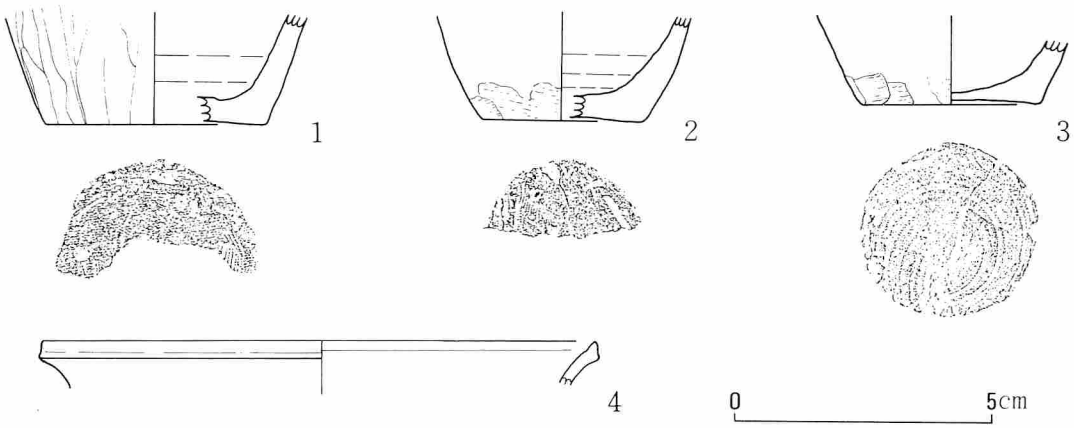
年代観は、須恵器高台付坏が猿投窯の岩崎25号窯式（八世紀中葉）から井ヶ谷78号窯式古式（九世紀前半）、身部屈曲部がやや違うが南多摩の御殿山9号窯式古式（八世紀第2四半期）や北武蔵の前内出1号窯式（同前）が考えられる。須恵器坏は折戸10号窯式古式（九世紀初頭）か井ヶ谷79号窯式古式、御殿山37号窯式（九世紀第1～第2四半期）、将軍沢2B－2号窯式（九世紀第1四半期後半～同第2四半期前半）が考えられる。土師器坏は坂本・末木・堀内編



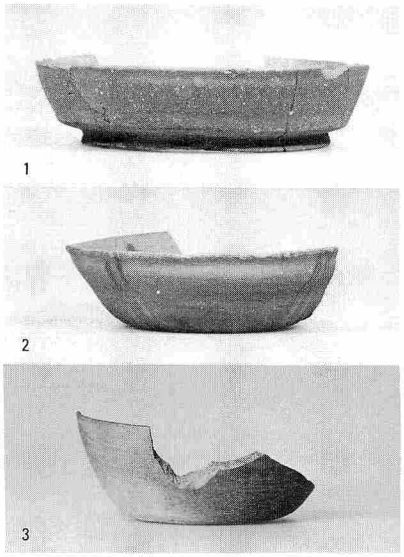
第14図　1号住居址出土土器(2)（3分の1）



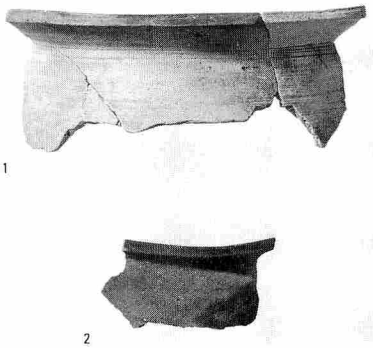
第15図　1号住居址出土土器(3)（3分の1）



第16図　1号住居址出土土器(4)（3分の1）

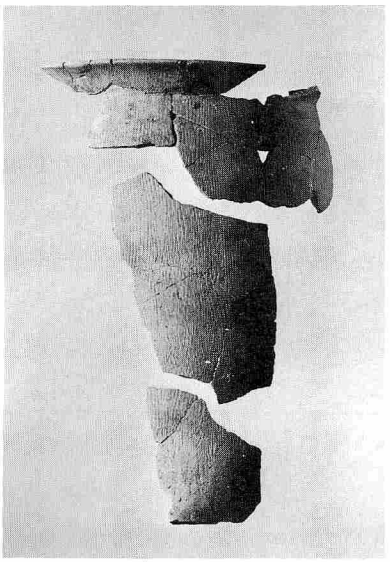


第17図　1号住居址出土土器（写真1）

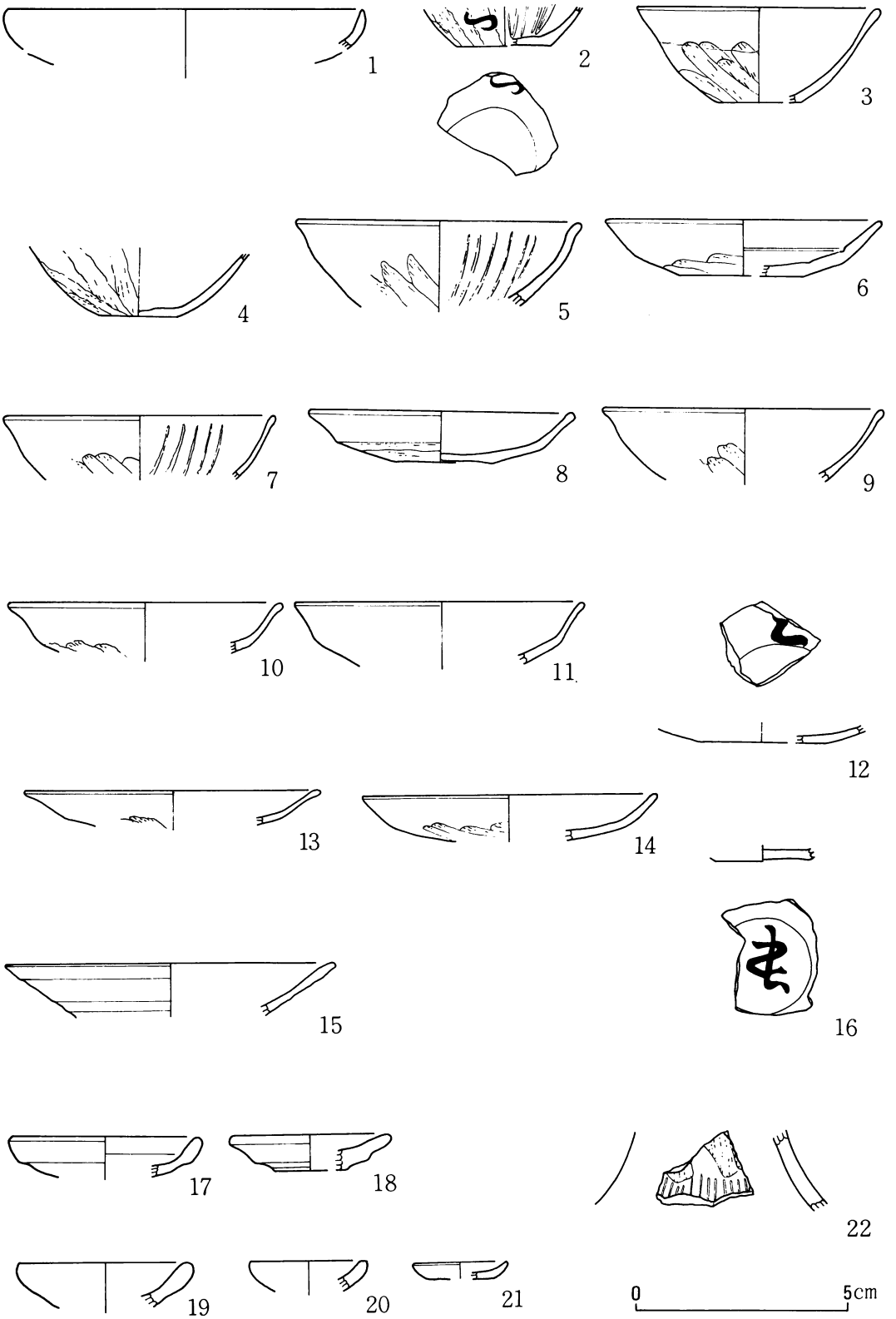


第18図　1号住居址出土土器（写真2）

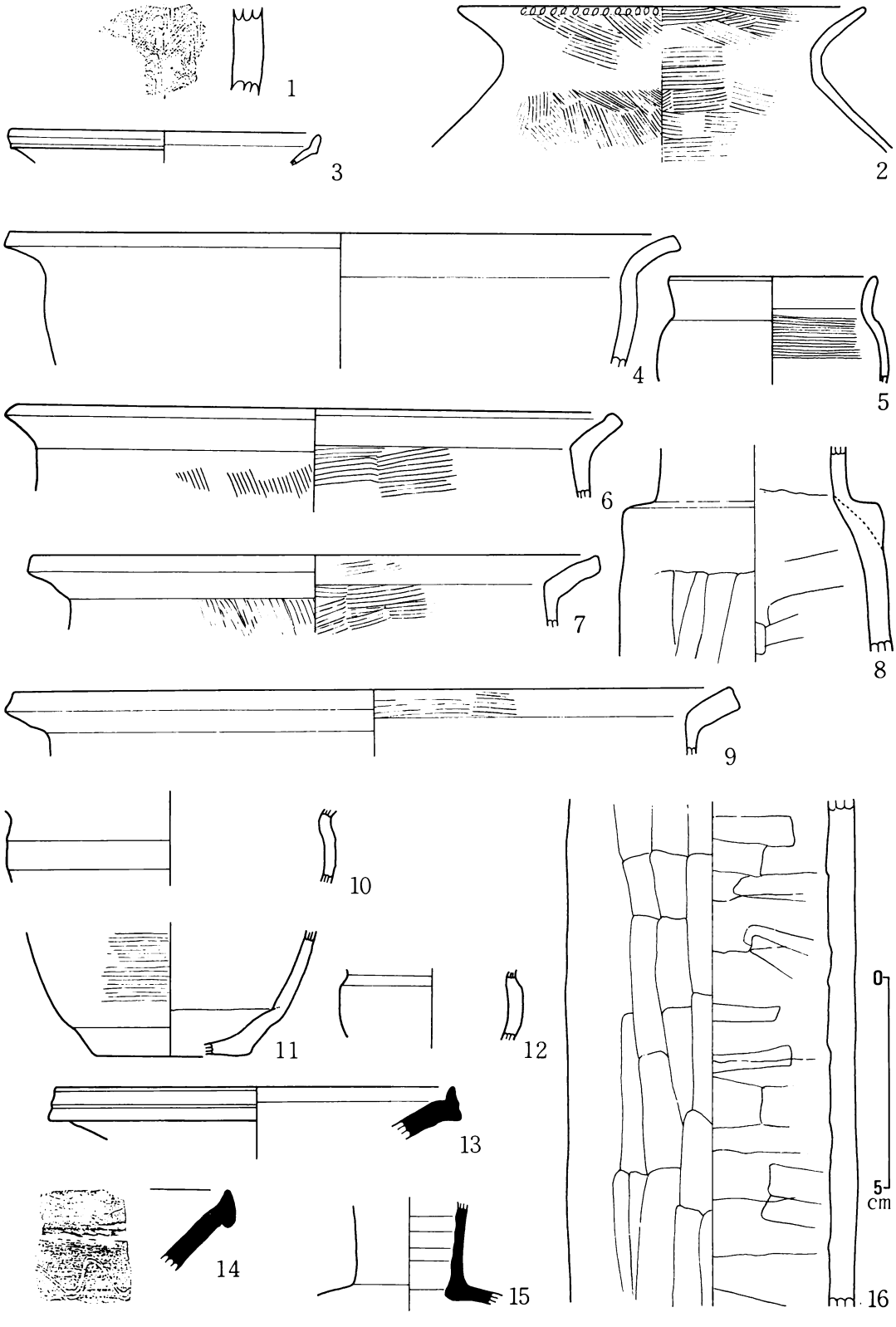
第19図　1号住居址出土土器（写真3）



第20図　1号住居址出土土器（写真4）



第21図　トレンチⅠ・Ⅱ出土土器(1)（3分の1）



第22図　トレンチⅠ・Ⅱ出土土器(2)（3分の1）

年Ⅴ期（八世紀第４四半期～九世紀第１四半期）に当る。また、同期にはロクロ整形甕が存在する。本住居下部は高台付坏のみから八世紀末期、上部を九世紀初頭と考えたい。

他所からの出土遺物の主なものは以下のごとくである。**坏**（第21図）　１は古墳時代後期。２・５・７は手持ちヘラ削りで暗文を有するもの。２はみこみに暗文がなく底径が小さい（坂本・末木・堀内編年Ⅸ・Ⅹ期）。５・７は玉縁口縁（同編年Ⅹ期）。３・４・９は暗文がみられない（同編年Ⅺ・Ⅻ期）。**皿**（第21図）　８・12・16は回転ヘラ削り（同編年Ⅷ～Ⅹ期）。８は玉縁口縁（同編年Ⅹ期）。10・13・14は手持ちヘラ削り（同編年Ⅺ・Ⅻ期）。11は内面がヘラ磨き、外面非調整で、胎土が白褐色。大小久保産の可能性がある。15は内面黒色の高台付皿。いわゆる信州系土器。17～21は土師質土器の小皿。18・21では回転糸切り痕が底部に残存。中世のものと思われる。なお、18はトレンチⅠの中世の穴内出土。**高坏**（第21図22）　ロクロ整形で脚部の身部側が縦方向ヘラ削り、下半部が暗文風ヘラ磨き。平安時代の土師器の高坏は出例が少く、甲府市大坪遺跡で報告されている程度である。時期を決定する材料がないが、この小破片は１号住居址覆土中出土なので、あるいは上部住居に近い時期かもしれない。この他、平安時代土師器蓋や高台付坏の小破片も出土している。**甕**（第22図）　１・２は弥生時代後期である。１は櫛描波状文を有する胴部破片。２は口縁端に刻目を有し、ハケメ調整された台付甕破片である。２はトレンチⅡ東部のⅢｄ層中より、胴下半部を欠くものの一個体分が出土した。４はロクロ整形である。１号住居出土のものと違い口縁部がゆるやかに外反する。鉢の可能性もある。トレンチⅠ出土。６・７・９はいわゆる甲斐型甕である。口縁部の厚さから６・７が坂本・末木・堀内編年Ⅺ期、９がⅫ期と思われる。３・５・10～12は小型甕。いずれもロクロ整形。５は内面にハケメ状の工具による回転調整がされ、外面下部に横方向のおそらくロクロ回転による薄いヘラ削りがされている。３・10～12は非調整。11は底部に回転糸切り痕を残す。13～15は須恵器。13・14は壺あるいは甕の口縁。口縁端部の形態や波状文など古式の要素をもち、奈良時代以前の可能性もある。15は長頸壺で、折戸10号窯式前後のものであろう。８・16は円筒状土製品。外面は縦方向ヘラ削り、内面は横方向ヘラ調整。８は有段部で、全体にヨコナデされている。接合法は上端をすぼめるように内傾させ、その肩部に有段部以上の部分を接合させたものである。有段部とそれ以上の部分とが連続していたのか、前後していたのかは不明。須玉町大小久保や高根町東久保などで平安時代の住居址から出土している。

本遺跡の出土品は、特に平安時代の量が多い。坂本・末木・堀内編年Ⅵ・Ⅶ期の可能性のある、みこみに暗文のある坏底部破片が若干みられるものの影が薄い。奈良時代の土器も可能性のあるものもあるが、１号住居と同時期のものである可能性の方が強く、やはり影が薄い。一方、同編年Ⅷ期からⅫ期は坏・皿・甕ともに量が多い。甕については図示しなかったが、口縁部の厚さからⅧ～Ⅹ期と思われるものがいくつかある。さらにⅩⅢ期以後の底部切りっぱなしの坏も若干あり、平安時代後半から中世へと連続しているものと思われる。また、縄文時代と思われる黒曜石破片１点も出土している。中世のほうろく片やひで鉢、石臼片も出土した。

Ⅶ まとめ

本遺跡からは、縄文時代、弥生時代後期、古墳時代後期、奈良時代、平安時代、中世の遺物が出土した。遺構は、奈良時代末期から平安時代初頭と考えられる住居址が上下に重なって2軒出土している。また、中世の開墾に伴うらしい穴が一基みられた。遺物の量をみると、平安時代の中頃、十世紀代の遺物が圧倒的に多い。こうした遺物のほとんどはトレンチⅠ・Ⅱの包含層中より出土しているが、上記の時期の遺構が近辺に存在していることはまちがいない。おそらく現在の駒井の集落に重なるように、縄文時代以来連綿と集落が形成されたのであろう。

さて、本遺跡で最も注目すべきは九世紀代のロクロ整形の甕の存在である。周辺では、中田小学校、大豆生田、大小久保で多量に見い出されており、甲斐型がほとんどない住居もある。大型甕は口縁端が平坦なものと丸いものとがあるが、おそらく後者が後出すると思われる。また本遺跡1号住居下部のように、技術的にさらに先行するものが存在する可能性もある。出現の年代を考えてみると、八世紀第3四半期と報告された中田小学校5号住居出土品の中に小型甕がある。しかし、同住居には九世紀初頭の須恵器坏も含まれ、甕もさまざまな形態が含まれており、出土遺物にかなりの年代幅が考えられ、いずれに伴うかは不明である。中田小学校3号住居で本遺跡1号住居と類似した須恵器坏が出土しており、確実なところでは八世紀末から九世紀初頭の時期と把えておきたい。大型甕については、八ヶ岳南麓の遺跡群ではほとんど見い出されないことからして、九世紀第4四半期に位置づけられる大小久保遺跡例を最後に急速に姿を消してゆくと思われる。これ以後、大型甕は甲斐型が主体を占めるようになる。しかし、小型甕については本地域から八ヶ岳南麓で、ロクロ整形のものが多いようである。ただし、ロクロ回転による横方向のハケメ風の調整がなされたものであり、九世紀代のものとはおもむきを異にしている。本県の周辺をみると、長野県内にロクロ整形の甕がみられる。しかし、大型甕の類例はない。本地域で一住居の大半をロクロ整形の甕が占めるような状況も考えあわせると、本地域で生産されたと考えた方がよさそうである。八世紀末から九世紀初頭にかけての時期に生産を開始し、大小久保に連るような土師器生産集団の存在を考える必要があろう。窯の位置については、今後追究する必要があろう。ロクロ整形という技術は須恵器生産とのむすびつきを強く連想させる。特に本地域のものは、その形態が須恵器に非常に似ており、須恵器生産集団によるものとみることもできる。須恵器生産集団の土師器生産への転換と本地域への移住、定着がなされたということになる。この流れを、須恵器生産集団の活路とのみ解釈することもできようが、三御牧をひかえる地理的条件、緑釉陶器を多量に出土した大豆生田遺跡や官衙的とされる湯沢遺跡の存在、大小久保での瓦や須恵器の生産、 827年の牧監の設置、藤井平の古墳時代後期以後の開拓史や生産力を考えると、公権力の存在を考えた解釈をせざるを得ないのではないだろうか。しかも、八ヶ岳南麓で開発が本格化する十世紀代にはほとんどその影が失せる有様は、まさに公権力と不離の関係にあったことを示すものではないだろうか。

ところで、ロクロ整形の甕は、石川、新潟（以上北陸）、茨城、栃木、千葉(以上関東北東部)岩手、宮城、福島（以上東北東部）に存在するようである。このうち、東北東部のものは形態

が山梨のものと非常に近似し、出現時期もほぼ同じようである。関東北東部のものは、他のものと様相を異にするようであるが、いずれでも九世紀代に出現しているように思われる。出現時期が九世紀代でほぼ同じであること、出現地域が北陸、中部、東北であることなど、当時律令体制の立て直しを図る公権力との関係で一度解釈してみる必要があろう。

参考・引用文献　佐藤八郎・森和敏・萩原三雄1978「先史―古代」『韮崎市誌』上巻、文化庁1981『全国遺跡地図―山梨県』、山下孝司1984『坂井南遺跡』、山下孝司1985『中田小学校遺跡』、山下孝司1986「奈良時代における甲斐の土器編年」『山梨考古学論集』Ⅰ、末木健他1976『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書―北巨摩郡須玉町地内―』、山路恭之助他1983『大小久保遺跡』、雨宮正樹1984『東久保遺跡』、磯貝正義・飯田文弥1973『山梨県の歴史』、坂本美夫1983「甲斐の郡（評）郷制」『研究紀要』1、萩原三雄1986「八ヶ岳南麓における平安集落の展開」『山梨考古学論集』Ⅰ、八巻与志夫1986「古代甲斐国の郷配置の基礎的操作」『山梨考古学論集』Ⅰ、坂本美夫・末木健・堀内真1983「甲斐地域」『奈良・平安時代土器の諸問題』、信藤祐仁他1984『大坪遺跡』、斉藤孝正他1983『愛知県古窯跡群分布調査報告（Ⅲ）』、服部敬史・福田健司1981「南多摩窯址群における須恵器編年再考」『神奈川考古』第12号、服部敬史1983「南武蔵の窯址」『奈良・平安時代土器の諸問題』、高橋一夫・宮昌之1983「北武蔵の窯址」『奈良・平安時代土器の諸問題』、佐久間豊1978「奈良・平安期土器の型式学的分析」『考古学研究』第25巻第2号、志村滝蔵1965『坂井』

昭和61年3月25日印刷
昭和61年3月30日発行

山梨県埋蔵文化財センター調査報告　第18集

山梨県韮崎市藤井町

駒井遺跡発掘調査報告書

発行所　山梨県教育委員会
　　山梨県土木部
印刷所　まいづる印刷